



ザルツブルク音楽祭^③ ハイライトの一つ ネトレプロコのガラ・コンサート

取材・文＝中東生
Text＝Shinobu Naka

ツアーの最後だったザルツブルク

マルクス・ヒンターホイザーが総裁となつて2年目の今年は、ザルツブルク音楽祭にとって、ある意味で「勝負の年」であった。おおむね肯定的に受け止められた新体制をどのように発展させられる

のかが注目されたからだ。今年もヒンターホイザーの審美眼で芸術性の高い公演が集められたが、比較的地味なプログラムは発表当初、常連客や関係者まで多少困惑させた。

そんな中で、終幕の花火のように光るアンナ・ネトレプロコ&ユシフ・エイヴァ

ゾフ夫妻のガラ・コンサートを8月29日に聴いた。2016年3月に日本で開かれたガラ・コンサートと同じ指揮者、ヤデル・ビニャミーニが、イタリヤ・オペラとは毛色の違うザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団と、シヨアの要素も強い二人の歌手との間の溝をうまく埋めながら、全曲暗譜で振り、どんな揺れ動きも失敗も確実にフオーローしていた。

それもそのはず、彼らはここ3年ほど、定期的に欧州や南北アメリカをツアーで回っており、今回のツアーはビニャミーニのザルツブルク音楽祭デビューとなる今回でいったん終了する。

ヴェルディ・プログラムで前半

前半はヴェルディ・プログラム。「一日だけの王様」序曲でそとイタリヤの風をおこしたあと、ネトレブコがシルバートとホルドー色のフリーツ・ドレスで登場した。彼女の最近のお気に入り、マクベス夫人のアリア(早くきて)を歌い、祝祭大劇場全体を掌握した。

エイヴァゾフは神妙な顔つきで登場し、「トロヴァトーレ」のアリア(ああ、あなたこそ私の恋人)から(見よ、恐ろしい炎を)まで続けて丁寧に歌った。昨年の日本でのコンサートでは、まだ支えが上がつてしまい、音程がうわずることもあったが、昨年のミラノ・スカラ座シーズン・オーブニングで、「アンドレア・シエニエ」のタイトルロールを見事に務めた現在では、重心が落ち着き、安心して聴けるようになった。最後の高音をク

Anna Netrebko & Yusif Eyvazov on Gala Concert



今回のプログラムはネトレブコ(右)とエイヴァゾフにとっても挑戦だったのか ©Salzburger Festspiele / Marco Barrelli

リアした後は、観客席を味方につけた。続く「ナブッコ」序曲は好調な出だし

だったのだが、重要なテーマが出てくると十分にフレーズが歌われないことに不満を感じた。オーケストラ全体の音も膨らまず、レガートが続かない。最後のテンポは勝負に出たが、速すぎて、倍速になる際の盛り上がりに欠けたのが残念だった。

彼らが《運命の力》に挑戦するのは初耳だったが、ネトレブコは(神よ、平和を与えたまえ)を、パーチエ(平和)とは正反対の、挑むような声で歌い始め、歌に入った途端にハーブとズレたり、オクターブの弱音跳躍で声が割れたり、粗さが目立った。対してエイヴァゾフの歌ったアリア(君は天使の腕に抱かれて)は芸術性の高い仕上がりで、彼のための選曲と思われる。

休憩前の最後は《オテロ》で、舞踊曲の後、第一幕の二重唱を歌った。エイヴァゾフの声は、オテロを歌うにはまだ中音域が発達しておらず、ネトレブコはデステモナの声の色を探しながら、また高

音で声が割れたが、観客は惜しみない拍手を送った。

プッチーニのオペラ抜粋プログラムの後半

後半はプッチーニに移り、「トスカ」の第一幕デュエットが始まったが、トスカの繊細でナイーヴなキャラクターがネトレブコに合っていない。また、せつかく《トスカ》が続くプログラムなのに、間に《マノン・レスコー》の間奏曲を挿入して流れを途切れさせた。ビニャミーニがオーケストラのフレーズを揺らそうと健闘しているのはわかるのだが、フレーズがプツプツ切れてしまう。しかし、イタリヤ・オペラの機微が、だんだんオーケストラに伝わっている実感を得始めていた。

その後《トスカ》のアリアに戻ったが、ネトレブコの声は意外とトスカの音域では光らない。カヴァラドッシのアリア(星は光りぬ)では、クラリネットが朗々と歌

うも、珍しいほど硬い音で違和感を覚える。エイヴァゾフの、いたる所にフェルマータがあるような熱唱にもビニャミーニはしっかりとついていく。そして「カヴァラリア・ルステイカーナ」間奏曲で、ザルツブルク・モーツァルテウム管はイタリヤ・オペラを理解したという達成感が得られたようだ。1日3時間で2日間の練習しなく、且のオペラからの抜粋を弾くという条件では上出来な成果であった。

最後は《蝶々夫人》で終わるはずだったが、ピンカートンのアリアが《トゥーランドット》のカラフのアリア(誰も寝てはならぬ)に変わるといふ訂正がプログラムに挟まっていた。ネトレブコは蝶々さんは、声ははまっているものの、可憐な装束でも無理がある。最後はタイふうのお辞儀をして、日本人としては興醒めさせられた。

ここでカラフのアリアが出るのは抵抗があったが、エイヴァゾフは丁寧な声で処理し、バヴァロツティを思わせる響きも聴かれ、最後は聴衆を大喜びさせた。この成功を確実にするために、プログラムを変えたのかもしれない。

どうしても残念だったのは、フィナーレの《蝶々夫人》第一幕の二重唱だ。譜面台は置いわ、エイヴァゾフは出を間違えるわ、いくらなんでも、もう少し練習してから舞台にかけて欲しかった。声もピンカートンにはまだ合わない。しかし、エイヴァゾフが着々と進化しているを聴けるのは頼もしい事であり、ネトレブコの魔法もまた効力があるように、熱狂のうちにガラ・コンサートの幕が下りた。